

# 序

「治療の対象になるような低血圧はあるのですか？」

これは、ノルアドレナリンの前駆物質として低血圧の治療薬として droxidopa（ドブス）が市販された時に循環器内科の先生が私に言われた言葉です。

「人は血管とともに老いる」といわれるように、現在では動脈硬化や高血圧などは生活習慣病として一般の人々にとっても大きな関心事ですが、低血圧についてはこれまであまり注目されてきませんでした。私たちの受けた医学教育を振り返りましても、低血圧の病態、診断基準などについては何一つ教わった記憶がありませんし、まして治療に関しての知識はまことに浅薄なものでした。

たまたま、隣の診察室で診察していた医師が患者さんに「心臓のペースメーカーも順調に作動していますし、心電図も血圧も問題がないのに、どうしてこんなに失神が起きるのでしょうかね？」と問いかけたことがありました。この患者さんでは、立位での血圧が慎重に測定されたことがなく、著しい起立性低血圧が発見されずにいました。

低血圧には、「起立性」のほかに「食事性」のものがあることを文献で知った時は、眼から鱗が落ちる思いでした。それは、昼食時まで普通に会話していたある患者さんが、食事を終わった後、付き添いの奥様が食事をしておられる間に忽然と亡くなられていたことを思い出したからであります。この文献と私の経験を教室の皆さんにお話しし、早速過去の診療記録を調査し、食後に他界された数例を見出しました。またこれと並行して、ブドウ糖負荷による血圧変動を調べ始めました。このようにして食事性低血圧の発現機序や治療についても新しい知見を得ることができました。食事性低血圧に着目し、これを系統的に検査し、その結果を報告したのは、おそらく日本で私たちが最初ではないかと思っております。

この書物は、こうした研究成果を踏まえ、多くの医家に食事性低血圧を中心に低血圧全般について理解をいただくように企画され、共同研究者が一丸となって執筆したものであります。

日常診療の一助となることを願ってやみません。

2004年2月

監修者 高橋 昭